

自動車部品製造の昭芝製作所

コスト減へ準備段階で知恵結集

キラリ!
わが社の商品・サービス

安全確保と低コストを実現するには多くの企業努力を必要とする。この厳しい経済情勢下、どう時代の求めに応えていくのか? エアバッグケースなど自動車用のプレス部品を手がける昭芝製作所(東京都練馬区)は「従業員の知恵を結集して、新技術に磨きをかけるしかない」(田中聡行常務)という。

同社では、受注に向け、マザー会社となる本社に10人の専門家集団で構成する「生産準備プロジェクトチーム」を設立。三

原佑介社長が陣頭指揮を執り、「活動板」と呼ぶボードに同社のマスタープランから見積もり構成まで、プロジェクトに関わる情報を張り出していく。

これは各担当者が事業全体を見渡し、情報を共有するための準備作業で、年40回ほどのミーティングを重ねて量産化に向けた道筋をつける。さらにこの過程から「現場の声を取り入れる」(田中常務)として、チームは生産拠点がある中国や九州にも足を運び、現場との調整も図るという。

第2段階となる「道具作り」では、実際の製作システムを組み上げることになるが、同社の強みはロボットのシステム設計

・製作を100%内製化していることだ。

内製化によってさまざまな要求に柔軟対応するだけでなく、徹底した部品・機材の再利用も実現。既存の装置を解体・リユースすることで、製作コストを市販のものに比べ平均で40%削減することを可能にした。

部品の付加価値が相対的に下がる中、設備費を抑えて確かなモノ作りを目指すことは、時代のニーズに沿った企業競争力となり、同時に猛追する中国や韓国など新興国の企業を「迎撃」する武器となる。

ただ、人の安全を左右する保安部品である以上、「完璧な設備」があっても、100%の信頼

昭芝製作所の組み立てライン



を得るには妥協は許されない。「人間がロボットに使われるのではなく、人間が主導権を握ってロボットを使いこなす必要がある」(三原社長)として、第3段階の製造工程では、完成した部品を実際に剝がし、破壊して、強度を徹底的に確かめていくという。

「立ち上げ段階で不良品の山

を作ったのは30年前の話。コスト削減が最重要課題の今日、不良品ゼロを目指す必要があり、その成否を握るのは準備段階だ」。こう語る三原社長を支えるのは、総人員の2割を占める開発員たちだ。この強力な技術陣を率いて、世界が認める次世代の製品作りを目指す。

(長谷川周人)